

白山山麓のニホンザルをめぐる狩猟伝承と尾添川域 住民の動物観をめぐる考察

広瀬 鎮*・水野 礼子*

I はじめに

白山山麓におけるニホンザルに関する民間伝承については、「白山山麓におけるニホンザルの民間伝承—尾添川にそって—(白山自然資源調査1972〔第1報〕)」において、すでにその伝承形態の実態の一部を報告した。本論では、同地区におけるニホンザルをめぐる住民の動物観を基盤として、生物としてのサルとその生息に対立する「狩猟」に関しての住民意識の分析をこころみてみたので、以下に報告する。なお調査は継続中であり、本論はその中間報告である。

尾口村でのニホンザル捕獲については、筆者の昭和46年10月4日の石川県郷土資料館資料調査に際して、天野武氏(石川県立郷土資料館)は、昭和10年頃まで全村をあげての「サルのまきとり」捕獲が存在していたことを述べているが、その内容については定かでない。しかしながら、犀川上流倉谷村の出づくり部落であった月ヶ原において、尾崎義雄氏(55才)が母から伝えられるサル狩りの話として、鉄製槍によるサル狩りの模様を明らかにしている。これは鉄砲によるサル捕殺の普及する以前のこと¹⁾、多人数をくり出しサルの群を包囲して、この包囲の輪をせばめていって最後に槍でつき、追い出してサルを殺すという口承である。ここでは、興味ある2点が、考察されねばならないと考える。すなわち、信心の深い人は、これをいみきらってこの仕事からのがれようとしたという点と、また、殺したサルは、そのまま放置しており、サルの肉を食べたり、皮はぎをしたり、売るといったことが全くなかったという点である。きびしい殺生戒や、たたりを恐れながらも、出づくりの生活保護のためにサルと対決した過去の山村民の生活の厳しさと、その間に内在する野生の生きものに対する人間感情の働らきについては、単なる「サルかヒトか」といった対立関係の中のみ、サルの自然生活を考慮する立場からでは導き出されない豊かな人間性を感じるのである。現にこの犀川上流のサル退治には殺されたサルの霊が山へ帰ることを期待した点から人々の動物霊への伝承や、サル神への恐れを意識した人々の心情が、手にとるように理解されるのである。

本論では、ニホンザル狩猟にかかわった地域の人々の考え方を分析的に考察し、日本の風土の中における、当地域住民のサルへのかかわり方の特色を明らかにしてみたいと考えるものである。いまだ、調査は続行中であり、情報資料も収集中である。

1) のと・かが 四季の野生 北国新聞社 昭和48年

II ニホンザルの狩猟における技術と伝承(槍から鉄砲へ)

1972年度の石川県立郷土資料館の調査による「白山山麓地域民俗資料緊急調査経過報告」によれば、生産・生業をめぐる山樵、狩猟、織染、手工諸職等の調査結果において、出づくりの生活では、山樵、

* 財団法人日本モンキーセンター附属博物館

狩猟，織染，手工諸織等はいわば従たる地位をしめており，これを主業とする事例は見出しえなかったということである。特に，狩猟では，出づくりの栽培作物に害をあたえる動物として，作物を保護するための狩猟の対象とされるものに，ウサギ・クマがあげられる。同地区では，サル，シシが出没して作物を荒したという伝承が濃い，鉄砲で射止めるほかはただ荒されるにまかせるという傾向にあったのが実情であろう。

その中であって，吉野谷村の畑与吉氏のサル猟に関する狩猟方法は同地区で狩猟にたづさわった人達の間で一般的に語られているもので，極めて興味がある。クマに関してはイブリダシ，ツレニハイロという捕獲方法が古風であったが，一般的には鉄砲打ち（トメウチ，カケウチ等）とセコ（オーヨボリ，ナカツギ，オクジキリ等）で，追い出しを分担してクマ狩りをしたとのことである。しかし，サルに関して特別な猟法が個有に発達したとは考えられない。

すでに人文班1971年第2回研究会において，千葉徳爾氏は，狩猟の技術について，白山麓とその周辺部とのくい違いが存在することに注目している。同氏は，マタギ伝承，動物観，動物伝承の調査をすすめて，「ミツグマを打つな」という口承の分布をしらべている。また，アナグマを打つ狩猟の技術は，福井県あたりまでしか伝わっておらず，白山麓においても「ミツグマをうつな」といわれている。さらに美濃，越後地方には大体古い狩猟が残っていることなどをあげている。サルに関しては，飛騨側（岐阜県）はサルを平気でとりにくるが，反対側の人はサルをとることをいやがるという事実も調査結果から明らかにしている。これについて東滋氏は，白山麓において元来クマトリはみられなかった。一方，サカナツリなどはひろくみられていたが，高山線の開通とともにかわってきた。以前は生きものをとることはわるいこととされ，殺生戒がゆきとどいていたとしているのである。

クマの狩猟における特殊なシステムについて，先述の千葉徳爾氏は今日も調査を続けているが，同氏によればカモシカに比して，サルはあまりとらなかつたようである。以上，白山山麓における狩猟を通じていえることは，サルの捕獲については，どうやら人間の側の意識の近代化と動物観の変化が前提となるといってまちがいなさそうである。同地区ではサルは，古い道德観，動物観のもとでは捕殺できなかつたものと言えよう。

蛇谷川でサルが生息している地域は，江戸時代までは加賀藩の狩猟場として，一般の人たちの手からのがれてきたところであるが，地形もまたサルの群れが保護されるに相当であった。さらに蛇谷川沿いにある中宮部落，尾添部落は古くから白山信仰の中心地であると同時に，仏教の盛んなところで，肉食をしないだけでなく，狩猟もしなかつた。林勝治氏は以上のような指摘を行なっている。そして狩猟が伝えられたのは明治初期で岐阜県白山郷の猟師たちによる。しかも，その頃の狩猟については記載されたものもなく，老人からの伝え聞きしかのこされていないのである。サルに関しての狩猟は，昭和の初期で，富山県の猟師が中心となって，中宮の数人が加わり，雄谷と蛇谷川に生息したサルを数十頭捕獲したという口承が屢々聞かれるのである。

その後，大量に捕獲されたのが昭和19年，20年で，戦後も毎年10頭近くとらえ，鉄砲による狩猟がさらに広がり昭和24年には尾添部落の人達が丸石のムレを17～18頭とらえている。この時から蛇谷川ぞいの部落の人達だけで狩猟をするようになったといわれている²⁾。しかし昭和36年蛇谷川ぞいのサルの捕獲を最後に，捕獲しなくなった。これは林氏による蛇谷のサルの狩猟をめぐる小史であるが，ここに住む人達とニホンザルとのかかわりあいは，狩猟のかかわり以前からのものであり，この点からこの地方個有の動物観，民間伝承の，いわばサルという生き物のイメージ伝承を明らかにしておく必要があるのである。果して仏教信仰の禁忌が，ニホンザルの生息を可能にしたのであろうか。今日，各地に伝えられるニホンザル狩猟をめぐる禁忌伝承は千葉徳爾氏によってくわしくあつめられている³⁾

が、九州一円にひろがっているサルをとることをいましめ、サルを射たないという風習は、白山山麓においてどのようにひろがっているのか、サルをめぐる民間信仰とのかかわりは地域の文化伝播と如何に関連していたか、今後明らかにしたいと考えている。山村生活のヒトと野生動物との間に生じた動物観にはどのような特色があるのかを民俗学の手法でとらえたいと考えている。

いづれにしろ、「槍から鉄砲へ」と、狩猟法が推移していった中で、尾添川上流地区に屋久島において開発されてきたドウヤワナ捕獲法のごとく工夫された特殊なサル専門のハコワナ猟が発達していなかったのは、ニホンザル生息数、生物殺生への宗教的戒律、禁忌、居住民の人口の少なかったこと、ニホンザルの経済価値の乏しさ等が、からみあっていたものと推測される。箱おとしによる猟法はキツネ、クマ、イノシシ、サルの生捕りに使用したが、サル専用のハコワナは発達しなかった。これはウサギの捕獲にみられるようなシブタのごとき特殊な捕獲用具が開発されている同地区にあって、対象的なことであり、サルの捕獲は、ずっと時代をへた近年になって黒焼等のサルの頭の需要に応じた捕獲と関連するようになってはじめて、狩猟の対象となってきたのであり、サル狩猟の専門技術がそれほど育つ余地のなかったことを示しているのである。

今日石川県立郷土資料館に収集されている狩猟用具を調査してみても、収蔵され、保存されている用具の中には、サル専用の捕獲用具はみあたらない。

すなわち、昭和47年2月末現在まとめの同館「民俗資料目録一覧表」によると衣食住用具、生産生業用具のうち、直接サル捕獲にかかわる資料は見当らない。狩猟に関する資料13点中、クマトリヤリ、ガンドバサミ、トバメトリ（タケチャンボ）、ムクロモチトリ、シブタ、ウサギトリタミノ、カビシャクリ、ヤスなどがみられるが、サル狩猟に関する特別な用具あるいは、屋久島において発達していたドウヤワナ方式のワナなどは見当らないのである。

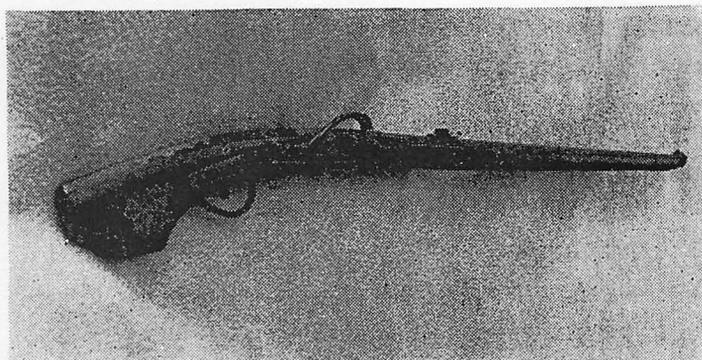


写真1 狩猟に使用した火縄銃 石川県立郷土資料館提供

中宮地区では、もっぱらサルの捕殺は銃によったとの聞き込みを得ているし、火縄銃も村田銃使用前の段階で使用されていた。また消耗品でもあった火縄狩猟銃は今日ほとんどのこされていないのが現状である。

- 2) 林勝治「白山のニホンザル」 モンキー Vol. 13—5 No. 109 1969 p. 6
- 3) 千葉徳爾 狩猟伝承研究 風間書房 昭和44年

III 白山山麓におけるサル狩猟伝承にみられる特色

ニホンザルの捕獲をめぐる話題の収集は、今日では断片的な情報収集による他方法がない。クマ打ちのごとくまとまった組による狩猟システムなどについての聞き込みは得られても、サルをめぐる狩猟についてはその口承は極めて乏しい。また、特にサルをめぐる殺生に関しては、サルの鳥獣保護法上のあつかいからして、かなり発言そのものに抵抗が見られ、1972年下吉野・瀬波・木滑新・中

宮・尾添12か村の居住者中、40才代5人、50才代10人、60才代5人、70才代5人、計25人のアンケートによっても、サル捕殺をめぐってはわずか5人のみからしか狩猟法にふれた回答は得られなかったのである。

ニホンザルの狩猟法として、トラバサミと鉄砲を使用して巻取が主であったと述べているのは、尾添の北村秀造氏(69才)である。同氏によればサルが明らかに商取引の対象となったことをのべている⁴⁾。特に槍、火縄銃での捕殺の記憶は高年齢者層に多いのである。同じく吉野谷村瀬波の橋本政一氏によると、昔は、部落民に布令して捕獲に行ったという報告を受けた。捕獲する時には訓示や指導を受けたとも報じている。ニホンザルの捕獲が法律で禁止になったのは、昭和24年の鳥獣保護法によるもので、同年以後サルの捕獲が禁止された。したがってこれと前後してサルの捕獲がみられても、その主体は、むしろ千葉徳爾氏の指摘のごとく、飛驒側の猟師が中心であって、カモシカに比して、サルはあまりとらなかつたものの、この美濃からの古い狩猟が同地区に影響をおよぼしたものと考えられるのである。ところが、このようなニホンザル狩猟経験の中で、尾添の山田辰男氏の「勢子でサルの周囲を包んで火縄銃、または村田銃で射殺する。または犬を使って木に追い上げて銃で射殺する」という具体的な狩猟法についての報告は、中宮での畑与吉氏の事例とほとんど同じで、典型的な同地区のサル捕獲法とも考えられる。また山田氏は、狩猟で得たサルは銃を持った人が勢子の一割増で配分した実例と、捕獲に際しては、場所や雪の状況を考慮して、村の猟師の最年長者が勢子の位置・銃人の位置等を指示したと伝えている。猟師が5人ぐらいで追手を組織し、ニホンザルの通路に当たっている場所(マチバ)にまちうけて射落す方法⁵⁾や、夜明に巻狩りをして、勢子が各所から順次声を出し、次第にサルが追われて集まるのを各方面から射撃するといった方法は他の地方でもきかれ、この方法が一般的のようである。

ニホンザルの捕獲禁止布告は、中宮の木戸雪氏などもよく知っていた。また、同地区に住む畑与吉氏(65才)は、出作り生活とサルについて、興味ある報告をよせている。出作りにサルが現われると、ブリキ缶などを夜明け前からたたいてサルをおどろかせ、追いはらったそうである。これは同地区の宮川与八氏(75才)ものべている。畑与吉氏はクマ狩猟の経験者であるが、クマとりに行つてサルという言葉を使うことは、禁止されていたと言う。サルの鉄砲による捕殺は、夕方にサルの動きを見ておいて、3人ぐらいのパーティーで翌朝サルをまいて巻狩り方式でまちおせして打つ。鉄砲を打って追いながらクラへかかる。多くは犬で木へ追い上げてそこを打つたということである。捕殺したサルは、背子に入れて運んだ。これをガマシヨイと呼んでいた。この地方ではサルはあまりゼニにならなかつたと述べている。ニホンザルの自然における群れの行動と関連して、狩猟技法をみれば、大変興味深いといわざるをえないのである。

しかしながら、明治以後白山蛇谷の鉄砲打ちは、サルを明らかに猟の対象としてきたようであり、白山ザルの黒焼きは全国的に有名であった⁶⁾。それは昭和21年頃の大がかりなサルの捕獲まで、何らかの形で継続されたようである。先述のごとく岐阜白川の狩猟を中心としてそれがなされていたと伝えられている。昭和初期の中宮では鉄砲打ちは10人に満たず、農繁期と相まって組織的な駆除はやらなかつた。それだけに年間の捕殺頭数はわずかであった。山形県の狩猟伝承にみられるような毛皮の一番よい時として1月～3月上旬を特定サル狩猟期と限定して考えるような口承は伝えられていないようである⁷⁾。

このような狩猟技術の伝承の乏しさをおぎなってくれるのが、「子供ザルのなきまねをしてサルをつかまえ」たり、「切腹のまねをするとそのまねをする。そこをつかまえる」など、民話の領域での伝承が伝えられていることである。しかしながら、白山山麓には東北マタギの神を助けた「サルマル」

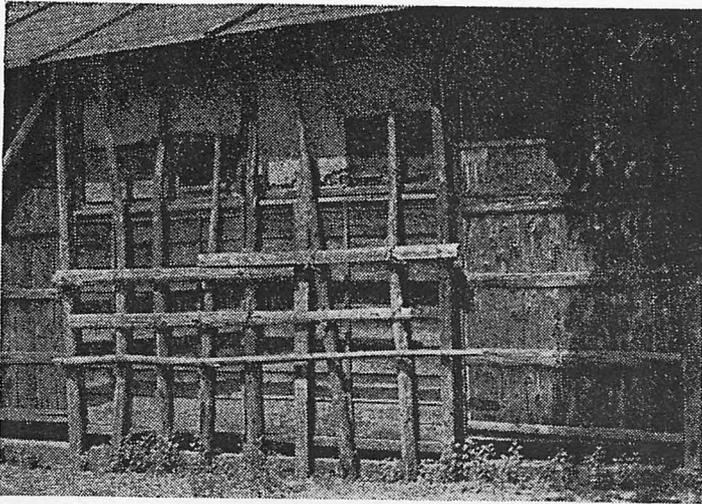


写真2

白山麓の民家
 中宮部落にて
 動物たちは決して敵では
 なかったと古老は語る

といった猿丸太夫伝承，狩の神の伝承が目下のところみあたらない。このことは白山山麓におけるニホンザルの狩猟をめぐるのは，我国古来のサルと結びついた民間伝承が存在をしておらず，近代になってからのものがその多くを占めているのではないかと思われる。また，「猟師でサルを多く殺し，報いでサルになったものをサジという⁸⁾」といったような伝承が現在のところみあたらないのである。しかも自然の環境条件もまた，ニホンザル狩猟の発達を許さなかったので豪雪，サルの生息数，利用価値などの総合的な検討が今後にのこされているのである。

また，薬用となるサルの頭骨の黒焼きについては，昭和47年のアンケート調査によっても，ほとんどの者が熟知している。吉野谷村中宮の外一次氏（64才）は，昭和23年頃まで金沢市東別院門前または薬局で多量に売られていたこと，白山ザルは特によくきくとされ，鶴来の薬屋でも一つ4～5円で売られていたこと，四国ザルに比し，1個20円（米1袋8円の頃）もしたということのをのべている。

こうしたニホンザルの狩猟をめぐる生業価値については，今だサルの毛皮，肉，その他についての具体的な利用のされ方をめぐる調査が充分でないため，その地域的特色を明らかにしえない。しかし，タイコのひもじめ，フィゴのセメ板にはる猿皮など，地域的に特色のある若干の報告を得ているので，今後の調査により一層明らかになるものと考えている。

- 4) 前出1) pp.396～397
- 5) 前出3) p.152
- 6) 前出1) p.396
- 7) 文化庁文化財保護部編 民俗資料選集 狩猟習俗 1 p.104
- 8) 嬉遊笑悪 南方熊楠全集 第6巻 p.159
 山田隆夫 ウナとサジ 近畿民俗 No.50

IV 尾添川域にみられる住民の動物観の現況

1974年1月，尾添川流域に居住する50人の方々に対して，アンケートによるニホンザルについての個有の動物観の実在の調査を試みた。かねがね，民間信仰におけるサルのモチーフの出現をめぐる考察をつづけてきたが，同地区においては山王や，庚申信仰とかかわるサルのイメージの伝承をみい出しにくい。動物としてのサルのおそれや，嫌悪の情などの存在があるものか，あるいは野生生物への独特な愛着心があるものかを世代別に調べてみたいと考えているものであるが，アンケートの回収はいまだ8件にすぎないので，詳細な分析は次報告にゆずり，ここではそれらにみられた顕著な傾向

について若干のべておきたい。(アンケートは引続き回収中である。)

サルは全国的に数多く存在している。尾添川流域の住民の間では、ヤエンボ、エテコ、カブラ、ジイサ、セイトと呼ばれ、尾口村尾添、吉野谷村、中宮地区で用いられている「カブラ」というサルの異名をあげたものが4名もあり、その中、狩猟経験者が2名、内2名は狩猟の経験はないが、野生ニホンザルの姿をみている。したがって山仕事の経験者に、カブラという異名が伝えられているものといえるのである。

次に、「サルが好き」と、答えたものは4名、「どちらでもない」、4名であった。サルに関して特に嫌悪観をもつものは一人もいなかった。ニホンザルに関しては、宗教的な禁忌からのみ、特定の動物観を抽出することは、明らかに危険である。すでに昭和47年度の調査において、中宮地区の住民にとってのサルという動物への動物観は、他県の一部にみられるような人間と対立的、攻撃的なものにはなっていないのではないかとこの考察を試みているが、狩猟関係者の観念形成においてはじめてサルはとらえられるのである。これら、サルが好きと答えた者の、好きな理由について「人に似ている」、「動作が好き」、「葉になるから」といった諸理由がのべられていた。葉用についての知識をもっていたものが、わずか1名であった点は、若干気がかりである。このことは、サルという文字をめぐる質問に対する答にもみられ、報告者のほとんどはサルという文字についての解答がなされなかったのである。ニホンザルに関しては、我国文化史にさまざまな文化事象があり、そのモチーフをめぐる文学、芸能その他への出現は無数であるにもかかわらず、同地区では、その事例は比較的乏しいのではないと思われる。

次に、野生ニホンザルとの出会いについてであるが、解答者8人中6人までが、大正期から昭和10年、昭和44年と印象的なサルとの出会いの時期をあげている。またサルの飼育例は8人中わずか1名であった。特に問題となる動物観については、「山や里にやってきたサルをみたらどんな感情をもつか」という問いに対して、「かわいい」4名、「こわい」3名、「一寸珍らしい」1名であった。しかも狩猟経験者のみに共通している点がサルの「こわさ」にふれている点、注目されるべきであろう。しかしながら、サルへの感情は、「かわいい」と感ずるもの、「こわい」と感ずるものが、半数ずつ存在しているのであり、ニホンザルという動物のもつ自然環境内での生存の形態と、日本人の生活空間、社会の実態との関連が、背景となっていることが、この点からも推測できるのである。

サルの毛皮を身につけるといふようなことは、今回の解答者中わずか1名、狩猟経験者からの報告にみられた。サルの伝承・諺として「サルはエンギがわるい、エモノがサル」といった諺をあげたものの2例、「ブナ尾山より下へくると雪がふる」2例、「サルがくると雨がふる」2例といった形で、天候に関した口承が伝えられている。雪や雨に関したものの以外の例には、現在のところ接していない。これら諺に比して、童話、民謡などについてはあまり知られていない。これらは、解答者の年齢、性別、職業などによる差とも考えられる。また、極めて特色ある口承として、「サルの群れを追うのに、葬式を出すまねをすると良い」という1例が報告されている。

サルの名称のつく道具名など事象にかかわるものは知られておらず、「サルコ」について1例の報告があるにとどまっている。また、祭礼・神事でのサルの出現は、今回の解答者からは皆無であった。吉野谷村、中宮村から、「山で赤いのはツツジにツバキ、ままだ赤いのはサルの顔」といった民謡が報告された。サルに関する彫刻や、絵画といったものを所有しているものは1名という結果であった。今回のアンケート様式は、動物観の抽出のためには極めて不備な点も多いが、その様式を別記しておきたい。

特にニホンザルをめぐる動物観を中心に考察すると、尾添川流域住民間の一部にはサルに関して強い悪感情、敵対意識はみあたらないものの、狩猟関係者の一部には「こわさ」を意識するものが存在していたという事実は重視されるべき点であろう。自然と生物とにかかわる民間伝承の把握には多くの困難がつきまとうのであるが、ニホンザルをめぐる地域住民間の動物観の歴史的推移はいまだ充分にとらえられてはいないので、今後引きつづき、継続中の調査資料の回収をもとに地方住民の生活意識の内にひそむニホンザル観について分析して行きたいと考えているものである。

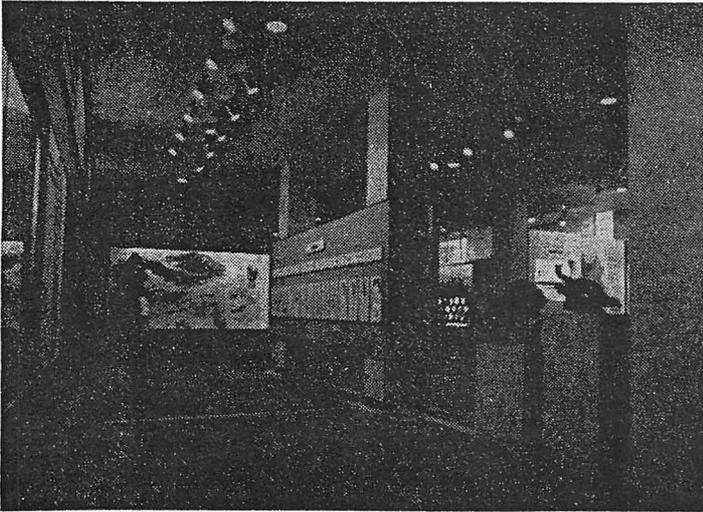


写真3 石川県白山自然保護センター
民俗部門展示
白山麓の狩猟の展示がなされ
ている

V お わ り に

白山山麓における住民にとって、白山に生息せる野生動物は、貴重な価値を持つ生物である。今日のように国土開発、産業の近代化の名のもとに、開発される自然の中に、住み続けている野生生物を、どこまで人間は、自らの生存と彼等との共存を認めてくらしたいとするか。これは、住民全体の関心事に他ならない。ニホンザルは、特に日本人のかかわりあいの多いた、歴史的にも長くから我々の周辺に共に生きてきた生物である。本論では1972年10月14、15日下吉野、中宮調査の折りの聞き込み調査と1974年1月に試み、継続中のアンケート調査にもとづきまとめたものであるが、中宮の畑与吉氏他、白山自然保護センターの水野昭憲氏、およびアンケート調査に御協力頂いた多くの方々のお力添えに深く感謝申しあげる次第である。特にニホンザルが保護獣である関係からその狩猟捕獲をめぐる調査についてはなかなか明白にしえない点も多いのであるが、今後とも基礎的な調査を継続していきたいと考えているものである。幸い自然保護センターにおける展示に、民俗に関する部門がとりあげられており、白山山麓におけるヒトと自然、生物とのかかわりの歴史が今後とも一層充実した展示によって明らかになるものと考えられるが、ニホンザルをめぐる動物観やイメージの伝承における地域的特色も明らかにして行きたいと考えるものである。

昭和49年1月アンケート様式

様

白山調査委員会 人文班

広瀬 鎮・水野 礼子

厳しい日々が続いておりますがいかがおすごでしょうか。

私たちの博物館では、ニホンザルについてあらゆる点からの調査と研究を続けてまいりました。

今回は、貴殿の暮らしておられる地方でニホンザルのことについてどんな感じ方を昔からしておられたかを、お聞きしたいのでお手紙をさしあげます。

と申しますのは、一昨年、昨年と2回ほど白峰や中宮にすんでおられる御長老の方々のお話しをお聞きしましたところ、サルのお話しをたくさん伺うことができました。

そこで、貴殿の御存知のことをぜひお聞かせ頂ければと思ひまして、お手紙の形でもお尋ねすることになりました。これからもどんどんそちらへおじゃまして、なまの声に接しお話しをお聞きするのをたのしみにしておりますが、今回は別紙のことについてお気づきのことぜひおしえ下さい。

お忙しい中誠に恐縮でございますがよろしくお願ひ致します。

アンケート様式 ①

サルについて御存知のことお気づきのことをなんでもお気軽に御記入下さい。記入しないところがあってもかまいません。なお解答はハガキに御記入下さい。

- ① あなたはニホンザルの名称をサル以外に使いますか。
例……ヤマノタイショウ、アニヤン、エテコ、カブラ、生徒
- ② あなたはサルが好きですか。きらいですか。
すき きらい どちらでもない
- ③ なぜすきですか。
- ④ なぜきらいですか。
- ⑤ サルという漢字でかわった字をご存知ですか。
例……獺 猿
- ⑥ ニホンザルの野生の姿をはじめてみたのはどこでしたか。そしていつごろでしたか。何頭ぐらいでしたか。
時代 場所 頭数
- ⑦ あなたはサルを飼ったことがありますか。
ある ない
- ⑧ もし山や里でサルをみかけたらどんな気持がしますか。
こわい かわいい 何も感じない
- ⑨ サルをつかまえたことがありますか。
ある ない

アンケート様式 ②

つかまえたことのある方はどんな方法でつかまえられましたか。

わな 鉄砲 とらばさみ 槍

- ⑩ サルの毛皮で衣服を作り、身につけたことがありますか。
ある ない
- ⑪ サルについての方言 まじないなどを御存知ですか。
例……サルが里におりると雨がふる

- ⑫ サルについての昔話をあげてみてください。
- ⑬ サルの名詞のつく道具や家具がありますか。
例……サルコ, サルオ
- ⑭ ウマ小屋やウシ小屋にサルの絵をはったことがありますか。
ある ない
- ⑮ お祭にサルのお面や衣裳を使ったことがありますか。
ある ない
- ⑯ サルに関する唄や民謡を御存知ですか。
どんな民謡かお教え下さい。
- ⑰ サルの絵や彫刻などをおもちですか。
ある ない
- 持っておられる場合はどんなものかかいて下さい。

以上